

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(17) 平成13年2月15日

農政・救荒シリーズ

日本最初の本格的救荒書『民間備荒録』(Q611-2)

救荒書とは一般には飢饉を生き延びる術を記した書物を指します。飢饉への備えを説き、飢饉の際にどのようにして食糧を食いつなげ、またどのような食物が食べられるかを伝えることを目的としています。救荒書の登場は、中国では15世紀初頭の『救荒本草』が最初です。日本ではさらに遅れ18世紀後半に現れます。奥州一関藩藩医建部清庵(正徳2(1712)年~天明3(1783)年)が記した『民間備荒録』が、本格的な日本最初の救荒書で、それ以降の救荒書の一つの手本となりました。当館の久能文庫には、版本2巻が所蔵されています。(Q611-2)

建部清庵は漢方外科を修得しながら、オランダ医学にも深い知識を持っていました。また『解体新書』で有名な杉田玄白と親交を結び、さらに『蘭学階梯』の著者大槻玄沢の師でもありました。

『民間備荒録』の最初の刊行は宝暦5(1755)年、10(1760)年、明和8(1771)年と諸説があるものの、当館が所蔵するものは文政7(1824)年版です。

『民間備荒録』の記述からみると、宝暦5年に東北地方は5月から異常な低温となり、8月まで雨が降り続く冷害に遭い、16世紀末以来という惨状となったとあります。清庵はその惨状を目の当たりにし、さらに1607年に俞如為が記した中国の救荒書『荒政要覧』を見たことで同書の編纂を思い立ちました。本書は『荒政要覧』や徐光啓の『農政全書』をもとに、宮崎安貞の『農業全書』や貝原益軒の『大和本草』や寺島良安の『和漢三才図会』などの成果を参考にしながら成立しました。建部はこの書を見てもわかるように中国の成果を受け継ぎ、農書・本草学分野の成果を活用し、地域性を考慮した植物の栽培にまで神経を払っていました。序の部分で、「この書は、もっぱら肝煎・組頭という村役人に、飢饉に苦しむ貧しい農民を救わせる方法を教えることを目的としており、実のなる木々を植えて、今後の飢饉に備えさせようとするものである。」といい、村役人に飢え苦しむ民を救う方法を伝えるという現実的な飢饉対策を唱え、同時に飢饉対策の責任が村役人にあることを断言しています。

本編は上下巻によって大きく内容を変えており、上巻では飢饉の際に食糧とする植物(なつめ・栗・柿・桑・菜種)の栽培法や飢饉に備えて食料を蓄える方法が記され、下巻では人々を飢えから救うために草根木葉の正しい食べ方とその解毒法を述べています。

『民間備荒録』に記載した救荒のための植物を中心に、104種の植物を採録した図集が『備荒草木図』です。『備荒草木図』は、清庵死後、杉田玄白の娘婿になった息子杉田伯玄が、父の遺稿を校訂し世に出しました。文字の読めない当時の庶民にも一見してわかるようにとの配慮のもとに編纂されたものです。

【参考資料】

『日本農書全集』第18巻・第68巻(610.8/11)

「日本における救荒書の成立とその淵源」白杉悦雄

(『東アジアの本草と博物学の世界 上』所収 499.9/16)

『近世農書に学ぶ』飯沼二郎(610.3/127)

『近世科学思想 上』古島敏雄

(『日本思想体系 62』 121.08/100)